

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部 松岡萌映

「JFC の子どもたちは日本に来て正解だったのだろうか」。春日丘中学校での半年間の学習支援ボランティアを通じて湧いてきたこの疑問について考えることが、私のフィリピン研修のテーマであった。フィリピン研修では、フィリピン政府機関や NGO など様々な立場から日本への移民に関わる人々を訪問した。

Batis center という NGO を訪問したとき、日本のいわゆる大企業で働く JFC の女性に話を聞いた。彼女は日本の職場で起こる大小様々な出来事に違和感を覚えているようだった。その中には決定的に差別であるといえるような出来事もあった。例えば、彼女が上司に結婚を報告したとき、その上司は「子どもを産むならその前になにか成果を残さなければ昇進できなくなる」とプレッシャーをかけたという。今の日本の社会では、外国人であることや女性であることが障害になりうるのだと痛感させられた。彼女が抱える問題は彼女や JFC だけの問題ではない。それは外国人労働者や移民だけの問題でもなく、日本の社会自体が抱えている問題だと思った。大学卒業後の進路について考えているいま、それは私自身にも大きく関わる事柄だった。私がボランティアを通じて疑問を持つようになったのも、JFC の子どもたちがこれから生きていく日本の社会は彼らにとって優しいものではないような気がしたからだった。しかし、問題を抱えているのは日本だけではない。たった 1 週間のフィリピン滞在の間にも、フィリピン社会にある重要な問題をいくつも目の当たりにした。特に、宗教上の理由が強いとはいえ、離婚も中絶も認められていない社会は女性が生きていくには不安すぎる。

研修を通して実感したことがもうひとつある。JFC の子どもたちには、フィリピンと日本、両方のアイデンティティが確かに存在しているということだ。Batis center で出会った人たちは「私たちの居場所は日本にもある。日本で働く権利がある」と言っていた。彼女らが日本を初めて訪れたとき、見知らぬ日本人から当然のように日本語で話しかけられたことで、彼女自身のなかに日本人としてのアイデンティティがあることを再認識して涙が出た、というエピソードが非常に印象に残っている。JFC の子どもたちが日本に来て正解だったのか、それは未だに分からないが、彼らは日本にいる権利がある。ならば、日本は彼らが自由に生きていけるような社会でなくてはならないと感じた。そしてその社会を必要としているのは JFC だけではない。

研修中、参加者それぞれが感じたことを共有せずにはいられずに、ホテルの部屋で夜中まで議論をしたことがあった。テーマは性、結婚、教育など多岐にわたった。フィリピンで感じたあの切実な危機感をこれからも忘れずにいたいと思う。